

神経性食欲不振症の5男子例

古 元 順 子

岡山大学医学部附属病院神経精神科
(主任 大 月 三 郎教授)
岡山大学医学部附属病院三朝分院
(主任 森 永 寛教授)

安 本 生 子

岡山大学医学部附属病院神経精神科
(主任 大 月 三 郎教授)

(1982, 12月25日受付)

はじめに

岡山大学附属病院神経精神科および岡山大学三朝分院内科で報告者が直接治療を行った神経性食欲不振症は55例で、その内5例が男子例であった。ここでみる女子例と男子例との比は10対1で BEUMONT (1972) や CRISP (1972) の欧米における文献に現われた男子例の対女子例比が9対1ないしは15対1であるとするのに略一致する。報告者は発達論的な立場で、神経性食欲不振症の女子例について報告した(古元, 1982 および古元, 1983)が、男子例については発症頻度が低いため今後症例報告の集計と症例の長期にわたる追跡調査を行うことが必要と考える。本報告では神経性食欲不振症の5男子例の概略を示し、発症年代別にみた臨床像の比較を試みたい。

対象は広義の神経性食欲不振症の診断基準すなわち、(1)器質的異常疾患や精神病が認められない。(2)標準体重の20%以上の体重減少を示す(3)ある時期に始まり3カ月以上続くという条件をみたすものとした。

症例提示

症例1 角○和○

発症年齢 12才

家族・家庭環境

両親と父方祖母および姉との5人暮らし。兄がいたが幼児のときに死亡している。母親は、本児と姉の間に1回および本児のあとに1回人工流産を行ったという。父方祖父は若い時に死亡し、祖母は女手で父を育てた。祖母がしっかり者で一家を支配するのに対し父は従順でおとなしい。母親は若い時に食事を食べず著しい痩せを来し

たというのが結婚後は特に体重の変動はない。父方祖母との折合いが極めて悪く被害妄想と嫉妬妄想を抱いている。父親はこの病的な母親に対してなす術を知らないかのように無力である。本児の姉には特記する異常行動はみられないという。

生育歴

本児が乳幼児の頃より母親は家庭に落ちつかず、本児を連れて実家と婚家との間を行ったり戻ったりして来た。本児は生来小心で内気な子供であり、母親に気に入られようと母の云うままに従ったという。10才扁桃摘除後一時期食物を嚥下するのが気にかかる様子を示し食べないことがあった。

発症の状況

小学校6年の秋、修学旅行から帰ってきたときを境に食べなくなったのに気付かれた。次いで同じ頃運動会で宣誓書を読まなければならないのが苦痛にみえ、学校に行かなくなり、食べないことと痩せが増悪した。

心理行動面の特徴

母親が自転車の後部にのせて学校への送迎をすると通学するようになり、昼食時には自転車にのせて自宅に連れ帰り本児の好物を作って与えた。患児は徐々に食べる量を増したが母親以外の人、たとえば担任や祖母が食べさせようとするとう腹痛を訴え、あるいは嘔吐した。ロールシャッハテストでは母親への依存と敵意の両価性が

みられた。

身体面の特徴

病前体重の24%の減少を示した。二次性徴は未発達であった。脳波上の所見として、slow wave dysrhythmia と 6 cps positive spikes が認められた。

症例2 森〇一

発症年齢 13才

家族・家庭環境

両親の間に本兄と2才下の弟が生れたが小学6年のとき両親は離婚した。母親によると父親は気が弱く無力であったという。父方祖父は戦死し、父方祖母が父親とその弟達の3人の子供を育てた。父方祖母は支配的干渉的であり、母親が病弱であることを理由に離婚を奨め、父親は祖母に従って離婚した後すぐ再婚した。母親は陶芸家の家庭の長女として育ち気性の勝った人である。本兄が小学2年のとき以来腎炎を患い入院生活が長く続いた。離婚するに至ったことに対しては、愚痴を言わず、また離婚後も親に頼ろうとせず、自立の道を求め、将来引きとるつもりで子供たちを一時期婚家先に預けた。母親は、本兄が食欲不振を示すようになったのを知ると直ちに手もとに引きとった。近くに住む母方祖母に食事の世話を助けて貰いながら仕事を終り、本兄の治療のための通院も続けた。母親は治療の初期には涙もろく抑うつ的にみえた。

生育歴

小学入学前まで喘息発作を屢々起す子供であった。臆病、内気だが負けず嫌いで成績は上位を保った。小学2～5年の間は母親が臥床がちであったが特記する異常には気付かれていない。小学6年両親が離婚し、弟と共に、父親の再婚した家に残された。

発症の状況

母親と離れ、父親と義母のもとで暮し始めてから次第に食べる量が減ったという。

心理・行動面の特徴

拒食と痩せを否認する。空手と卓球に熱中する。母親と一緒に食卓にいたときのみ食べる。ロールシャッハテストで母親に対する依存性と攻撃性が目立つ。母親的なものへの同一化傾向がみられた。

身体面の特徴

病前体重の25%の減少。二次特徴の未発達。徐脈がみられた。

症例3 長〇豊〇

発症年齢 16才

家族・家庭環境

両親と兄3人、姉1人の7人家族であったが、長兄は結婚して別居し、次兄は家を離れて就職している。姉は精神薄弱であるが家から通って簡単な作業に従事している。父親は硅肺のため退職し、母親の替りに家事を行っている。父は飲むと酒癖が悪いが通常はおとなしいといわれる。母親は勝気で活動的な人であり結婚前から現在まで経理事務の仕事が続けている。

生育歴

身体的には特記する疾患をみなかった。幼いときから主張しない子供でありいつも古着で満足した。むしろ女兒の衣服を好む傾向があり姉のお下りを着ていた。小学校上級の頃から家庭で家族を笑わせようと道化的に振舞うのが目立った。学校では競争的で徹底的に頑張る。弱い者の世話をよくするのも目立った。

発症の状況

中学3年となり、高校入試のために剣道を中止した。その後大腿部の贅肉を気にし始め食事制限を始めた。高校入学後は剣道の猛稽古を再開し、食べないことと痩せが目立つようになる。腎炎と発熱を起したため受診するに至った。

心理行動面の特徴

一家の将来についての不安と過度の空想傾向が目立つ。痩せることへの喜びがあり身体像については贅肉がつくことへの嫌悪がみられる。過度の活動性も目立つ。派手なガウンやマフラーの着用などにみられるような女性的な服装への関心がうかがわれる。ロールシャッハテストでは分裂気質とヒステリー傾向がみられ、男性性への関心がみられない。

身体面の特徴

病前体重の28%減少。徐脈が目立つ。貪食傾向と嘔吐がみられる。頑固な便秘も幼児期から続いている。二次性徴は認められるが血漿テストステロン値が低い。

症例4 坂〇雅〇

発症年齢 19才

家族・家庭環境

両親と姉との4人家族であったが姉は結婚して別居したので1人っ子のような環境である。父親は管理職に就いていて多忙であり、母親は過度に神経質で不安な人に見える。精神病や神経症の負因は否安される。

生育歴

特記する問題を示さず、両親の期待に副って成長した。

発症の状況

高校1年とき腎炎を発症したため運動を中止すると共に蛋白尿を恐れて食餌制限に神経質となった。しかし高校を卒業するまでは母親によって痩せは気付かれていない。大学に入学し親元を離れて下宿生活を始めるようになってから過度の節食を行い痩せが急速に増悪した。

心理行動面の特徴

蛋白尿に過度に拘わる。ロールシャッハテストでは未熟な性格と自立への不安がみられる。男性度が低い。

身体面の特徴

病前体重の27%の減少。徐脈と下痢が目立つ。二次性徴はみられるが、血漿テストステロンの低値を示す。

症例5 児○泰○

発症年令 26才

家庭・家族環境

両親と男ばかりの3人兄弟の末っ子として育った。父親は昼と夜と別の仕事を持ってよく働く人といわれる。母親が父親替りのように家内のことを一切とりしきったという。患者の兄2人も働き者で、それぞれ世帯をもって別居している。患者は高校卒業後、国鉄の売店に勤務し22才で結婚。両親とは別に住み1児を得ている。近親者に精神病や神経症は否定される。

生育歴

特記するような疾患に罹らず成長した。兄2人が強くてたくましいのに比べて常に劣等感があったという。父は不在がちであったので親しい感情をもてないといい、母親は頼りになると感じ何ごとにも逆らわないで気に入られるようにして過したという。

発症の状況

職場の同僚から「腹が出ている」といわれ気にしていた。たまたま国鉄の昇格試験に失敗したことと、配置換えで面白くなく気分が減入ようになった。やけ喰いが始まり胃腸の不調が続いているとき、同僚が貨車を誘導中2つの車両の間に挟まって死亡するという事故が起きた。自分もいつかあのような事故で死ぬのではないかと不安が募った。家庭でも夫としての不能感が強まった。食あたりをきっかけに食品汚染への拘わりが強くなり食べられないことと痩せが著しく目立つようになった。

心理・行動面の特徴

面接では *la belle indifférence* を示す。食品汚染への不安を言及するが食べないこと、痩せることへの喜びがうかがわれる。「腹がひこんで恰好よかった」と感じ、危険な職場につく体力や夫としての責任を果す体力がないことを平然と述べる。ロールシャッハテストでは分裂気質と不安神経症的傾向が目立つ。男性度が低く、母親を自己像として同一視するのが特異とみられた。

身体面の特徴

病前体重の35%の減少。拒食の前に貪食の時期がみられた。血漿テストステロンは低値を示した。

まとめと考察

神経性食欲不振症男子5例の臨床像を発症年代別に要約すると次のようになる。

心理的特徴

(1)前思春期発症の2例はいずれも環境因が発症に強く影響し、拒食または食欲不振によって母子分離不安を防衛する。ロールシャッハ反応では母親への依存と攻撃の両価性が目立った。

(2)思春期および青年期の2例はいずれも仲間内で競争的であり、その1例は肥満嫌悪のため、また他の1例は身体疾患への過度の拘わりのために節食を起し、ロールシャッハ反応では男性度の低さが目立った。

(3)成人期の1例は拒食または食欲不振を示すがその結果の痩せとともに疲労感を訴え非活動的であり、職場や家庭での責任を回避するのが特異であった。ロールシャッハ反応では母親との同一化が目立った。

身体的特徴

5例の内前思春期発症の2例では二次性徴の発現がみられないが、思春期・青年期・成人期発症の3例では二

次性徴が認められた。しかしこれらの3例における血漿テストステロン値は著しい低値を示した。

以上のように広義の神経性食欲不振症を男子例でみる限り、発症年代によって心理的機制が異なることがわかる。すなわち狭義の神経性食欲不振症 (Feighner, 1972) で特有とされる肥満への嫌悪は5例中思春期に発症した1例にみられるに過ぎず、Feighner の基準に一致する神経性食欲不振症を定型群とすると男子例の多くは非定型群といわざるを得ない。しかし BRUCH (1971) によると彼女の自験9例の男子神経性食欲不振症の内、定型例は5例にしかすぎなかったが、25年の追跡調査時の最終結末と始めの診断的分類との間には相関々係がみられなかったといわれる。とすると本報告でみる定型、非定型の差異は発症の性別によるための他に、発症の年代別によるためでもあるのかもしれない。男子例の症例数を増すことと併せて、広義神経性食欲不振症の男女例について発症年代別の発症機制と病態とを検討することが必要と思われる。

稿を終えるにあたり御指導と御校閲をいただいた岡山大学医学部神経精神科大月三郎教授、同大学三朝分院森永寛教授に厚く御礼を申し上げます。

文 献

BEUMONT, P. J. V., BEARDWOOD, C. J. and RUSSELL, G.F.M. (1972) The occurrence of the syndrome of anorexia nervosa in male subjects. *Psychol. Med.*, 2 : 216.

BRUCH, H. (1971) Anorexia Nervosa in the male. *Psychosomatic Medicine*, 33 : 31.

CRISP, A.H. and TOMS, D.A. (1972) Primary anorexia nervosa or weight phobia in the male : *Brit. med. J.*, Report on 13 cases, *Brit. Med. J.*, I/5796 : 334.

FEIGHNER, J.P., ROBINS, E., GUZE, S.B., WOODRUFF, R. A. Jr., WINOKUR, G., and MUNOZ, R. (1972) Diagnostic criteria for use in psychiatric research. *Arch. Gen. Psychiatry*, 26 : 57.

古元順子 (1982) 発達の観点からみた Anorexia nervosa の心身医学的研究 第1報 思春期女子例, 岡大温研報 52 : 33

古元順子 (1983) 発達の観点からみた神経性食欲不振症の心身医学的研究 第2報 成人期女子例, 岡大温研報 53 : 17.

ANOREXIA NERVOSA IN THE MALE REPORT ON 5 CASES

Junko KOMOTO

Neuropsychiatric Department of Okayama University Medical School (Director : S. OTUKI)
Division of Medicine, Misasa Branch Hospital, Okayama University Medical School (Director : H. MORINAGA)

Ikuko YASUMOTO

Neuropsychiatric Department of Okayama University Medical School (Director : S. OTUKI)

Abstract : The case histories of 5 males diagnosed as anorexia nervosa were presented.

The summary as follows :

- (1) 2 pre-adolescent cases; Onset of self-starvation of each case is coincided with separation from each mother, with the psychological meaning of retaliation towards the mother of each patient and of compensatory gain in dependancy need. Rorschach test of either case presents the ambivalent attitude towards each mother, of love and hate.
- (2) An adolescent case; Onset of self-starvation is coincided with competitious hyperactivity in sport, with some compensatory gain in dependancy need and with keeping pride in pubertal competition, including a pursuit in the slim body image. Rorschach test presents pausity of masculinity.
- (3) A young case; Onset of self-starvation is coincided with separation from his mother, as seen in pre-adolescent case, with phobic avoidance of protenuria from which he suffered previously. Rorschach test indicates paucity of masculinity.
- (4) An adult case (married); Onset of self-starvation is coincided with his conflicts at work and home, with the psychological meaning of keeping him from undoing duties as a worker and as a husband. Rorschach test presents mother-identification instead of father-identification.